

バートランド・ラッセルの記述理論形成の過程

——意味論・存在論の見地から——

野 本 和 幸

論理的構文論上では、記述理論とは、指示句 denoting phrase・記述 description が命題関数とその変項への一般化により文脈的に定義される不完全記号であること、を示す「論理的翻訳 logical translation」の方法である。⁽¹⁾だが、この記述理論の、意味論的・存在論的意義についての従来の分析は、必ずしも当を得たものとは言い難い。その主たる理由の一つは、ラッセル自身の意味論・存在論の発展に即して記述理論を位置づける作業が不充分であったことによると考えられる。

小論は、『数学の諸原理』*The Principles of Mathematics* (一九〇三年) (以下『諸原理』と略称する) 以来の脈絡中に記述理論を位置づけ、『諸原理』での意味論・存在論にラッセル自身がいかなる困難を見出し、記述理論によりその困難をいかに切り抜けようとしたか、を解明することを目指す。かかる基礎作業は、記述理論自体の意味論・存在論上での是非をめぐる論争の吟味にも、不可欠と思われる。

小論は、先ず『諸原理』での存在論・意味論の概要及びそれらにラッセル自身の見出し出した困難を追跡し、次いで記述理論の解決法とその若干の問題点を明らかにする。

註——B・ラッセルの著書・論文名は、参考文献中の略号に従う。その他の著者名に続く番号は、参考文献での番号を示す。
(1) Black, [1] P. 242.

(2) Vide. Strawson, [19], [20], [21]; Sellars, [18]; Caton, [4]; Linsky, [13]; Hochberg, [10].

I. 『数学の諸原理』での存在論とそれからの脱出

(一) 『諸原理』でのラッセルの存在論は、大略以下の如くである。

思维の対象、真又は偽の任意の命題中に現われ、「1」と算えられるもの、言及 mention されるものはすべて、有 being をもち、存在者 entity として容認される⁽¹⁾。存在者は「項 term」と呼ばれ、命題の論理的主語となり、不変不滅、自分自身との数的同一性 numerical identity、他との数的異他性 n. diversity をもち⁽²⁾。(a) 単項 simple term には、「もの thing」と「概念 concept」が属し、「もの」には存在 existence をもち存在者のみならず、神話やフィクション中の非実在的对象も含まれる。概念的同一性・異他性⁽³⁾も併せもち qualitative な「概念」には、述語 predicate ないしクラス概念 class-concept と(内包的)関係 relation が属し、論理的定項 logical constant も又「概念」と解される⁽⁴⁾。(b) 複合的項 complex term には、統一としての全体 whole as unity である命題 proposition と、集積としての全体 whole as aggregate である一としてのクラス class as one とがあり、命題ははっきり存在者と認められている⁽⁵⁾。しかし多としてのクラス class as many 即ち項の数的連言以外に、一としてのクラスを存在者として認めるべきか否かについては、ラッセルに動揺がみられる⁽⁶⁾。

(二) やがてラッセルは、このような存在論には、「いかほど抽象的な研究においても保持されなければならない實在感覚 feeling for reality が欠けている⁽⁸⁾」として、廃棄を宣言することになる。存在論上のかかる転換は、マイノング批判という形であらわれている。(i)「まるい四角」の如き自己矛盾的特性をもつ不可能な対象を認め⁽⁹⁾、かかる対象に、単に脱有 *Außersein* のみならず、存在⁽¹⁰⁾をも許す結果になる故に、マイノング理論は二重に矛盾律に抵触するというのが、ラッセルのマイノング批判の骨子である。だが、ラッセルの誤解が指摘されている。(i) 矛盾律は現実

的及び可能的対象にのみ適用され、脱有的対象には適用されない⁽¹²⁾、(ii)不可能な対象は存在を要求しない。また「まるい四角」といった句を含む文は、マイノング理論においても、件の存在者の非存在を主張する文にすっかり変換する⁽¹³⁾。従ってラッセルの批判は、マイノングには当らず、むしろ自らの『諸原理』の理論に的する、という訳である。だがそれにしても脱有という存在領域の要請は、推賞されるべき発見ではなくて、疑わしい理論のための *ad hoc* な工夫ではないのか。自らの『諸原理』での理論のみならず、マイノング理論にもみられるひどく人口稠密な存在論に、オッカムの剃刀適用の必要を感じたというのが、ラッセルの本旨であろう。現在のフランス王に非存在と両立可能なある稀薄な実在性をもたせ、フィクションや自己矛盾的存在者さらには非存在者自体にさえ客観的地位を認め、*So sein, Außersein, Quasisein* と⁽¹⁴⁾ いった部分的ないし擬似的存在なる曖昧な存在領域を設定することは、「健全な実在感覚 a robust sense of reality」⁽¹⁵⁾ と背馳する故に、容認されるべきではないのである。

世界の究極的構成要素の探究としての存在論は、通常、言語の論理的構造との相関において構想されてきたし、『諸原理』での存在論の枠組もそうであった。それ故、記述理論の存在論への貢献度を確定するには、論理的翻訳の技術^{テクニツク}としての記述理論が、言語の論理的分析にどのような新しい武器を与え、それが人口過剰気味の存在論のどのような局面においてオッカムの剃刀適用を可能にしたか、を明らかにしなければならない。しかしそれには先ず、ラッセルの意味論上の転換を解明しておく必要がある。

- (1) Russell, [POM], § 47, p. 43.
- (2) *ibid.*, § 47, p. 44.
- (3) *ibid.*, § 50, pp. 46-7.
- (4) *ibid.*, Preface, p. xv.; cf. Klenke, [12], p. 417 f.
- (5) Russell, [POM], § 81, p. 84.

- (6) *ibid.*, § 38, p. 35.
- (7) 翻本 [23], pp. 8-13. ミヤヤナがこの問題に一定の解決を与えたのは [ML], pp. 81 f. 更に [JPM], Intro, Ch. III, pp. 71 f.; Pt. I, Sect. C, p. 187 f. などについて述べた。
- (8) Russell, [JPM], p. 169.
- (9) Russell, [OD], p. 45.
- (10) Russell, [Review], p. 439.
- (11) Vide. Findley, [6], Ch. 2; Gram, [8], pp. 120-30.
- (12) Meinong, [14], S. 17; Gram, [8], p. 128.
- (13) Gram, [8], pp. 128-9.
- (14) Vide. Black, [1], pp. 241-2.
- (15) Russell, [JPM], p. 170.

Ⅱ. 『数学の諸原理』の意味論

(一) ラッセルは文中の語 word を、哲学的文法 philosophical grammar の見地から、(i) 実詞 substantives、(ii) 形容詞、(iii) 動詞に区分する。(i)には通常の文法という固有名や空間、時間、物質⁽¹⁾という本来の実詞と、名詞化された形容詞・動詞という派生的実詞とがあり、文の主語となる。が、(ii)、(iii)は主語にならず、断定 assertion の部分としてのみ現われる⁽²⁾。

意味論的にみて、この時期のラッセルの考えの際だった特徴は、文中のすべての語が固有名 proper name とみなされていることである。⁽³⁾(この名前一般 name in general)としての最広義での固有名を以後「固有名(n)」と呼ぶ。)つまり文中のすべての語は、「固有名(n)」として、ある存在者を指す indicate。本来の実詞(これも又固有名と呼ばれており、以後「固

有名⁽⁸⁾」と記す)は、「もの」を指し、他のすべての語(派生的実詞、形容詞、動詞⁽⁴⁾)は「概念」を指す⁽⁵⁾。かくて *Intuiting Theory of Meaning* と呼ばれてよいような意味論の原則(I)「文中に現われるすべての語は、ある意味 *some meaning* をもたねばならない」⁽⁶⁾(イタリックはラッセル)「語はすべてそれらが自分以外のなにかを表示する *stand for* 記号であるという単純な意味で、意味をもつ」⁽⁷⁾が立てられている。この原則中の「意味 *meaning*」は(これは心理的と呼ばれているが⁽⁸⁾)、語の指す項即ち「もの」と「概念」という存在者に他ならない。指すということ *indicating* は、言語的表現と存在者との間の、意味論的關係である。(以後、指されるもの *indication* としての意味を、「意味(i)」と記す⁽⁹⁾)

(I) 英語で *all, every, any, a, some, the* によって冠頭される複合的言語表現は、指示句 *denoting phrase*⁽¹⁰⁾ と呼ばれるが、この指示句に関するラッセルの意味論には特異な錯綜がみられる。ラッセルは、一般に指示句が「指示概念 *denoting concept*」というある抽象的存在者を指す、とみなす。例えば *all men* という指示句は *all men* という「クラスの概念 *concept of class*」を指す。従って指示句の「意味(i)」は、「指示概念」である。ところでラッセルは、フレーゲの *Sinn* を *meaning* と翻訳し、それを自分の「概念そのもの *concept as such*」⁽¹¹⁾即ち「指示概念⁽¹¹⁾」とはほぼ等価とみなした。つまり *Sinn* としての意味(以後「意味(s)」と記す)は、指示句の指す「指示概念」に他ならず、「意味(s)」は「意味(i)」の一種にすぎないが、「指示概念」という特異な複合的概念がフレーゲとの連関で際だたせられている。かくて「*the*」によって概念から導来された固有名のみが *meaning* をもつと言われうるのであって、*John* というような語は *meaning* なしに指すようにみえる」⁽¹²⁾(指示句としての固有名を以後「固有名(d)」と記す)し、概念を指す固有名もまた「なんら明確な *meaning* をもつことなしに概念を指す」⁽¹³⁾この引用文中の *meaning* は「意味(s)」つまり「指示概念」と解される。ラッセルの考えでは、「意味(s)」をもつのが指示句のみであるのは当然なのである。

(三) さてところでラッセルは、「指示概念」が命題中に現われても、その「指示概念」が命題の論理的主体であることを否定する。「私はその男 the man に会った」という文の表現する命題は、「指示概念」the man「にかかわる about のではなく、それとは全く異なる対象にかかわっている」のであり、一般に概念にはなく、一つの項ないし項の複合体にかかわっている。(14) (イタリックはラッセル)。この命題の論理的主体は、ある具体的な特定の男である。(15) このようにある概念を用いて概念でないところの「もの」を表わし designate 記述する describe ことを、指示する denote と、ラッセルは呼ぶ。(16) 「指示概念」は、指示作用 denoting というこの特性をもつ故に、それ自身の論理的本性上表象的 symbolic である。「指示概念」のみが、非心理的で論理的な意味 logical meaning をもつ。(17) かくて指示作用は、「指示概念」という抽象的存在者と具体的な「もの」との間に成り立つ奇妙な意味論的關係である。「指示概念」のみがもつところの論理の意味即ち指示体 denotation としての意味を、以後「意味(d)」と呼ぶ。ここに言わば Denoting Theory of Meaning と呼ばれてよいような意味論の原則(II)『「指示概念」は「意味(d)」をもつ』が立てられていることになる。

(四) かくて『諸原理』では、いくつかの意味の固有名即ち「固有名(n)」、「固有名(s)」、「固有名(d)」の使い分けが行われ、またいくつかの種類の意味つまり「意味(i) (indication)」、「意味(s) (Sinn)」、「意味(d) (denotation)」が考えられており、この時期の意味論は以下の如くにまとめられよう。

(i) 文中のすべての語(「固有名(n)」)は、「意味(i)」をもち、(a)本来的実詞(「固有名(s)」)の「意味(i)」は「もの」、(b)その他の語の「意味(i)」は「概念」、(b₁)但し、指示句(「固有名(d)」)の「意味(i)」はフレーゼの Sinn との対応で特別「意味(s)」とされる。「指示概念」である「意味(s)」を「固有名(d)」以外の「固有名(n)」がもたないのは当然である。かくて言語的表現とその対象との関係は指示すること indicating に尽き、「文中のすべての語は、『意味(i)』をもつ」という意味論の原則(I)が立てられる。

(ii) 他方、「指示概念」という抽象的存在者と「もの」との間には指示作用 *denoting* という特異な関係があり、『指示概念』はその指示体である『意味(d)をもつ』という別種の意味論的原则(II)が立てられている。

(1) 「空間・時間・物質」とうのは奇妙な言い方であるが、敢えて推測すれば、「ここ」、「今」、「これ」等の自己中心語 *ego-centric words* の意だ。

(2) Russell, [POM], § 46, p. 42-3.

(3) *ibid.*, Appendix A, § 476, p. 502.

(4) 純粹な形容詞や動詞が「概念」を指す固有名として扱われることは奇妙な感を与える。実際ラッセルも一応「概念」を「*狭い*」の概念 *concept as term* と「概念そのもの *concept as such*」とに区別する ([POM], § 49, p. 46)。⁹ がラッセルは「*狭い*」の区別を「概念」と固有の *intrinsic* 存在論的な区別ではなくて、*外在的 external* 文脈的区別にすぎないとする。詳しくは、註本 [23], p. 5 参照。

(5) Russell, [POM], § 48, p. 44.

(6) *ibid.*, § 46, p. 42.

(7) *ibid.*, § 51, p. 47.

(8) *ibid.*

(9) cf. Cassin, [3], p. 257.

(10) Russell, [POM], § 58, p. 56.

(11) *ibid.*, Appendix A, § 476, p. 502.

(12) *ibid.*

(13) キャンミンズ、[3], pp. 260-1 以下、その *meaning* を「意味(d)」と解しているが、前後の文脈からみて疑わしい。

(14) Russell, [POM], § 65, p. 64. 以下、その「項 *term*」の用法は「*もの* *thing*」と同義である。

(15) 命題の主語は *いふ* *say* の *subject*。[POM] § 490, p. 516.

(16) *ibid.*, § 56, p. 53. *denote* は *指し示す* の *signify* と異なり *designate* と *describe* という語で言い換えられていること

は、指示句の意味論的機能の二重性を示唆するものとして注目されてよい。

(17) *ibid.*, § 51, p. 47.

(18) *all, every, any, a, some, the* が冠頭される「指示概念」の各指示体は、それぞれ、諸項の数的連言、命題的連言、変項連言、変項選言、定項選言、単一の確定項である。*(ibid.*, § 56-60, 63, pp. 57-60, 62.)

Ⅲ. 『諸原理』の意味論批判

(一) だが『諸原理』の意味論には重大な難点が認められる。記述理論形成の背景には、存在論上の転換とならんで、『諸原理』での意味論の難点克服という課題があった。『諸原理』中の意味論から記述理論へのかかる重大な意味論上の転回点を、私は「指示作用について On Denoting」(一九〇五年)という有名な論文中の四八頁と五一頁の議論に認める。以下この論文を「OD」と略称し、問題の議論の箇所を「OD」(⁴⁵/₅₁)と記す。

さて件の「OD」(⁴⁵/₅₁)でのラッセルの批判が誰にむけられているのかをめぐる論争がある。従来、(i)この議論はフリーゲ批判であって、しかも全くの的はずれであるとの説が有力であった。⁽²⁾ それに対し、(ii) P・T・ギーチは、この批判が『諸原理』の理論に向けられていると主張し、⁽³⁾ C・E・キャッシンがこの方向で詳しい論証を行なった。⁽⁴⁾ (iii) 他方、R・イェーガーは、ラッセルの『諸原理』の理論とフリーゲの理論の総合としての“Frege-Russell meaning/denotation thesis” (F-RT) の批判であると主張した。⁽⁵⁾

(i) の説の第一の難点は、⁽⁶⁾ 「OD」(⁴⁵/₅₁)にはフリーゲの名が一度も言及されておらず、文献上の直接の支持がないことである。(i) の説の根拠としては、そこでラッセルが先行の箇所⁽⁷⁾ で Sinn/Bedeutung に meaning/denotation の訳語を当てており、⁽⁸⁾ 「OD」(⁴⁵/₅₁)での meaning/denotation の用法が Sinn/Bedeutung の用法へ厳密にパラレルとれるということであろう。だが『諸原理』では、フリーゲの Sinn/Bedeutung が meaning/deno-

tation に近いことを認めつつも、フレーゲの *bedeuten* とラッセルの *denote* との重大な相違に留意して、フレーゲの *Bedeutung* の訳語としてはむしろ *indication* がとられていた⁽⁸⁾。また $[(OD)]^{(45/s_1)}$ では、*meaning* が *denotation* を指示する *denote* という論理的関係 *logical relation* が明言されているのをはじめ、後述の如く『諸原理』のかの特異な指示作用 *denoting* を前提すれば $[(OD)]^{(45/s_1)}$ の有意味な解釈が可能であり、かつそうしてはじめて了解できる議論の全体的運びとなっている。従って議論の実際は、純粹なフレーゲ批判とはみなしえない。

だが(ii)の説を採るとしても、ラッセルが『諸原理』での用法を破った使用をしていることも事実である⁽¹⁰⁾。従って、ラッセルがフレーゲ説を全く念頭におかず、専ら『諸原理』の意味論にかかわっているのみだとは言えぬ。それは(iii)の説が正しいのか。だがイエーガー説は、「指示的複合体 *denoting complex*」のある特異な解釈に基いており、それに従うとラッセルは、フレーゲ説にも『諸原理』にも対応物のない「指示的複合体」という得体の知れぬもの(とイエーガーはみなす)を導入し、これを自ら否定することにより、フレーゲ説でも『諸原理』の意味論でもない F-RT を打倒している⁽¹¹⁾。ドン・キホーテということになる。だが、私は「指示的複合体」が「意味を指示するもの *that which denotes a meaning*」に他ならないとするイエーガーの解釈は誤まりとみなす⁽¹²⁾。

それでは $[(OD)]$ ではじめて登場する「指示的複合体」とは、(a)指示句⁽¹³⁾、(b) *sense (meaning)*⁽¹⁴⁾、(c)「指示概念」⁽¹⁵⁾のいずれであるのか。結論的に言えば、私はキャッシンと共に、「指示的複合体」が『諸原理』での「意味(S)」つまり「指示概念」に他ならないと考える⁽¹⁷⁾。

ところで、 $[(OD)]$ でのラッセルの用語法の混乱は、単にラッセルの不注意というよりはむしろ、彼が『諸原理』の理論のみならずフレーゲ説をも同時に批判しようと考えていたことを示すと思われる。だが $[(OD)]^{(45/s_1)}$ がフレーゲ批判の意図を含むとすると、A・チャーチや R・バートラーの指摘した如く、ラッセルはフレーゲの慎重に区別した表現の使用 *use* と言及 *mention* を混同しているのであって、表現の *Sinn* 及び *Bedeutung* とは区別された表現

自体への記法を導入すれば、ラッセルの批判は消滅するであろう。指示句に関しては、フレーゲの Sinn がラッセルの「意味(S)」に対応するとしても、フレーゲには、ラッセルの非難を回避する途があるわけである。従って〔OD〕^(48/51)は、フレーゲ批判としては当たらない。だからと言ってしかしこの箇所の意味がないのではなく、単にラッセルの副次的な思惑がはずれているにすぎない。逆に〔OD〕^(48/51)の実質的批判は、『諸原理』の意味論に中するところを明確に摘出すべきなのである。

従って、私は原則的には(ii)の説のギーチやキャッシンに同意し、『OD〕^(48/51)の meaning/denotation は、『諸原理』における指示句をめぐる indication (「意味(S)」/denotation と厳密にパラレルであるとみなす。かくて私も、『OD〕^(48/51)が指示句に関する『諸原理』の意味論に対するラッセル自身の自己批判であり、『諸原理』の理論から記述理論への意味論上の重大な転換点を示すものと解する。

(一) さて、『OD〕^(48/51)の議論についての私の解釈を提示しよう。それには先ず、その暗黙の前提をなしている『諸原理』での、指示句に関する意味論上の論点を再確認しておかねばならない。

(i) 指示句は、「意味(S)」つまり「指示概念」を指す indicate。
 (ii) その「意味(S)」は、「意味(d)」つまり「指示体 denotation」を指示する denote。
 (iii) 言及 mention できるものはすべて存在者であるから、表現を何かを指すために使用する use ことなしに、ただその表現に言及することはできない。⁽¹⁹⁾

(iv) 「指示概念」が命題中に登場する場合、その命題は、その「指示概念」についてではなく、その「指示体」についてかかわっている。つまりその命題の論理的主語は「指示体」である。

さてラッセルの直面した問題はこうである。「意味」(「意味(S)」)と「指示体」とを区別する以上、常に「指示体」とは全く独立に、「意味」について語りうるものでなければならぬ。だが、『意味』と『指示体』との結合を保持しつ

つ、同時にその両者が全く同一と化することを阻止することには成功しえない。⁽²⁰⁾

何故であるか。ラッセルの議論⁽²¹⁾についての私の解釈は以下の如くである。⁽²²⁾（ラッセルに従い、 C_1 は指示句を、 C_2 は「意味(S)」を、 C_3 は C_1 の「指示体」を、表わす。）

(A) ラッセルがそれについて語りたいのは、 C_2 の「意味(S)」つまり C_1 である。ところが、『諸原理』の前提(iii)により、指示句 C_1 を、その使用を離れてただ言及^{ユース}はできないから、 C_2 の「意味(S)」について語ろうとすると、必然的に C_1 の意味について語らざるをえない。ところが C_1 の意味が命題中に登場すると、前提(iv)により、その命題は C_1 についてではなくて、 C_3 について語ることになる。従って、 C_1 の意味について語るといことは、「指示体」 C_1 の（もしあれば）意味について語ることになってしまう。（また、 C_2 は指さす^{インディケイト}に指示するのみだから、 C_2 の意味とはつまり C_1 の「意味(d)」即ち C_1 の「指示体」即ち C_3 に他ならないとも言えよう。）かくて、 C_2 の「意味(S)」について、つまり C_1 について、語りたかったのに、「指示体」 C_1 について語っていることになってしまう。

(B) そこで『諸原理』の前提(iv)を逆手にとって、 C_1 自身をなにかより高次のレベルの「指示概念」 C_1' の「指示体」即ち C_3' とみなしてみる。すると C_1' の現われる命題中で、 C_1 即ち C_3 について語りうるようにみえる。しかしこの想定にも困難がある。(a)『諸原理』では、「指示体」は「もの」であったが、 C_1' の「指示体」である C_3' は、「もの」ではなくてそれ自身「指示概念」である。高次の「指示概念」と低次の「指示概念」との関係は、通常の指示作用ではない mysterious な関係になってしまう。(b) C_1' を導入して、 C_1' が C_1' の「指示体」だとしても、それはみかけ上命題中で C_1' が語られるようにみえるだけで、 C_1' 自身は「指示概念」故、その命題は結局 C_1' の「指示体」即ち C_3' についてしか語れないし、また「指示体」から「意味」への帰路はない。

従っていずれにしても、 C_2 の意味即ち C_1' (meaning)のみを C_1 (denotation)について語ることなしに、語れることは、『諸原理』の意味論の前提に立つ限り不可能である。

(三) さて自ら摘出した『諸原理』の意味論にまつわるこれらの困難を、ラッセルはどのような方向で切り抜けようとしたか。前提(iii)に関しては、依然ラッセルには、フレーゲの如き使用と言及との区別の必要性が強く意識されてはいない。彼の採ろうとした方策は、『諸原理』での前提(i)(ii)の破棄であった。即ち(i)指示句はなにも指さず、従ってなんの「意味(S)」ももたない、(ii)それ故、指示作用という特有の関係も廃棄される。更に、「意味(S)」が棄てられたのだから、そういう存在者が命題中に登場することはなく、(iv)も不必要となる。

このような意味論上の転換を可能にする言語的表現の論理的分析の技術を提供したのが、記述理論であった。

- (1) Russell, [OD], p. 48, l. 25-p. 51, l. 2. 頁廿五^四 *Logic and Knowledge*, ed. by R. C. Marsh (London, 1956) に於て。
- (2) Church, [5]; Butler, [2]; Searle, [17].
- (3) Geach, [7].
- (4) Cassin, [3].
- (5) Jäger, [11].
- (6) フレーゲへの直接の批判は、先行箇所 ([OD], pp. 45-7) で、「指示体」のない指示句が空クラスを指示するというフレーゲの方策は人工的で事柄の正確な分析となっていない」という論点に尽きる。
- (7) Russell, [OD], p. 45.
- (8) Russell, [POM], Appendix A, § 476, p. 502 及び footnote.*
- (9) [OD], p. 49.
- (10) Bedeutung の訳語に denotation を用い、指示句と意味の両方が denotation を denote する ([OD], p. 46, footnote 1) とか、指示句が意味と指示体の両方をもつ ([OD], p. 49) とかがその例である。
- (11) Jäger, [11], p. 62.
- (12) イェーガー説の典拠になっている [OD], p. 50, は、ラッセルが「指示的複合体」を指示するような高次の「指示的複合体」を想定していると解される箇所であり、やがて否定される abnormal に拡張された用法である。

- (13) Butler, [2], p. 354.
- (14) Searle, [17], p. 341.
- (15) Geach, [7], p. 211.
- (16) Cassin, [3], p. 266.
- (17) (a) ラッセルのあげている「指示的複合体」の実例 ((OD), pp. 48-9) '意味' ^{ネーミング} に対してと同様、'指示的複合体'にも一重引用符が適用されている ((OD), p. 48) '複合的意味 complex meaning' という用語法 ((OD), p. 45, p. 46) などから、'指示的複合体'は「意味」と同義と解される。(g)「意味」は「指示体」を指示すること ((OD), p. 49) '複合的意味'の現われる命題は、その「意味」の「指示体」にかかわっていること ((OD), p. 46) などから、'意味'とは [POM] の「意味(s)」即ち「指示概念」である。従って (a) ' (d) より、'指示的複合体'と「指示概念」'意味(s)」とは同義である。
- (18) Moore, [5], p. 63; Church, [5], p. 302; Butler, [2], p. 361.
- (19) 従って [OD] (48/n) は、ラッセルが使用と言及とを不注意に混同したのではなく、『諸原理』の意味論的前提からの不可避的帰結であった。
- (20) Russell, [OD], p. 49.
- (21) 該当箇所は [OD], p. 49, l. 15-p. 50, l. 19 の以下の解釈中(A)は p. 49, ll. 15-22; (B)は p. 49, ll. 22-30 に当たる。
- (22) 以下の解釈にあたっては、Cassin, C. E., [3], pp. 262 f. から多くを示唆された。
- (23) バトラー (Butler, [2], p. 363) の批判にも拘らず、ラッセルの引用符の用法は首尾一貫している。一重引用符、は指示句の「意味」を表わし、二重引用符、は指示句を表わす ((OD), pp. 48-9; Cassin, [3], p. 269)。この区別からも見てとれる如く、ラッセルは、表現の言及と使用の一手前まできている。

IV. 記述理論と意味論

(一) 『諸原理』ではそれ以上分析されず「固有名(d)」とみなされていた指示句が、実は文の独立の構成要素ではな
バートランド・ラッセルの記述理論形成の過程

く、その現われる命題は「完全に表現されれば、その句を含まず、その句は解体されてしまう⁽¹⁾」ことを、記述理論は示した。指示句が、単独語 *single word* 「固有名(d)」でなく、文の部分にすぎないとすれば、指示句はもはや指すことはないし、「意味(s)」をもつこともない。かくて『諸原理』の意味論的前提(i)は破棄され、「指示句は、それ自体ではいかなる意味^(ミナシ)ももたず、それらの句がその言語的表現中に現われるあらゆる命題が意味をもつ」⁽²⁾「指示句は本質的に文の部分であって、大部分の単独語の如くには、自前ではなんの意義 *significance* ももたない」⁽³⁾ことになる。ここで指示句の意味とか意義とか言われるものが、往々誤解されるように指示句に対応する「もの」ではなくて、「意味(s)」即ち「指示概念」であることが銘記されねばならない。『諸原理』以来ラッセルは一度も指示句の「指すもの *indication*」が「もの」であるとみなしたことはない。

さて前提(i)の破棄は、『諸原理』での意味論的原則(I)の、次の如き修正を必然化する。

意味論的原則(I*) 「文中のすべての単独語 *single word* は、『意味(i)』つまり *indication* としての意味をもつ。しかし指示句はこのような意味ももたず、その現われる文の意味に貢献するのみである⁽⁴⁾。」

(二) 指示句が単独語でなく、その「意味」というようなものもないとすれば、その「意味」が指示する *denote* ということもありえないわけで、前提(ii)は破棄され、従って『指示概念』は『意味(d)』をもつという意味論的原則(II)も破棄される。

ところがラッセルは、指示句の「意味(i)」つまり「指示概念」は棄てたけれども、指示作用 *denoting* という関係には、吾々の日常言語の用法からみてより自然な新しい解釈を与えて、その関係を保持する。即ち『諸原理』では指示作用は、「指示概念」と「指示体」との関係であったが、「(OD)」では指示句と「指示体」との関係とみなされている。

ところでラッセルの記述理論は、一切の指示句即ち記述の完全消去の方法である。確定記述 *definite description*

に限っても、それが本来的に properly 用いられる場合（つまり「 ϕ であるような唯一の存在者が存在する」〔E: (2a) ϕx 〕が充足されている場合）のみならず、非本来的に（つまり、 ϕ であるような存在者が存在しないか、または二つ以上存在する場合）用いられている場合も無差別に消去する。そこで、本来的に用いられている場合に限り、記述は指示する denote のであり、その「 ϕ であるような唯一の存在者」が、記述「(2a) ϕx 」の「指示体」である。⁽⁵⁾指示句、記述には「意味」はなく、ただ時折「指示体」があるのみ」なのである。⁽⁶⁾

かくて、「指示句（確定記述）は、その本来的用法においてのみ、その『指示体』^{デイクライネン}である唯一の対象を指示する」という新しい意味論の原則(II*)が立てられていると解される。

『諸原理』の意味論は、記述理論により、直接的には以上の意味論の原則(I*)、(II*)に修正された。

(三) 記述理論に立脚した意味論の原則(I*)、(II*)そのものの検討は、小論の直接の目的ではないが、今後の課題として、若干の問題点だけ指摘しておこう。

(a) 確定記述の本来的用法が充足すべき、「唯一の指示の条件 uniquely denoting condition」とは、(i)「確定記述の『指示体』が存在論的にみて、世界に唯だ一つしか存在しない存在者たるべし」という厳しい主張なのか、それとも(ii)「ある状況において、当の記述が指示しようと意図している存在者が少くとも一つ存在し、その状況内においては、その記述が他の存在者とは峻別されたその存在者のみを特定化しつつ指示すべし」という主張なのか、問題がある。[OD]の確定記述の例は、(i)の条件を充足する例と解されうるが、『諸原理』での the man といった例は明らかに、通常の「自己中心語 egocentric words」と同様、(ii)を充足するのみである。かくて、固有名、記述、自己中心語について、より立ち入った吟味が必要であろう。

(b) 「意味」を、ラッセルの如く、indication または denotation とのみ解する、つまり *Referential Theory of Meaning* を採ると、存在論上エコノミカルだが、吾々の言語による豊富な伝達機能は説明できぬとする周知の反論

がある。

ところで、ラッセルの記述理論が『諸原理』の意味論の唯一の克服策であるわけではない。指示句をめぐる意味論的前提は、四つあり、ラッセルの解決は、*Referential Theory of Meaning* の徹底の方向、即ち(i)(ii)従って(iv)の廃棄にあった。他方フレーゲ流に(iii)を破棄し、表現の使用と言及の区別に立ちつつ、「意味」を、存在論上の抽象的存在者として容認することなくして、生かす可能性がないかどうかとも考察に値する問題である。

(c)更に、吾々の日常言語の用法からみると、記述理論には不自然に映る点が認められる。

記述理論は『諸原理』中の意味論の、諸難点を回避するため、一切の記述を消去した。そのために(i)固有名が必ず指す⁽⁸⁾のに、記述は指示しない場合がある、(ii)普遍例化や等号に関する反射性の成立も本来的用法に限られる、のみならず(i)本来的用法においても、「 $a \parallel (x)\phi x$ 」は、それが必然的に偽でない場合でも、「 $a \parallel a$ 」(a は個体定項)の如き瑣末的命題ではない。⁽⁹⁾

これらの理由のために、固有名と記述、「指す」と「indicating」と「指示作用 denoting」の相違が強調され、更に「(OD)」より後の時期では、denote、denotation という用語法は殆んど姿を消して、describe に変わっている。

『諸原理』では、既述のとおり、denote が designate と describe との二語と代置され、「指示概念」の意味論的機能に、言及的 referring と記述的 descriptive との二重性が認められたに比して、「(OD)」以後では、記述が主に「限定的(記述的、帰属的)な仕事 the attributive (or descriptive or classificatory or ascriptive) task」⁽¹⁰⁾を果しているかの如き印象を与える。だがこれは不自然にみえる。吾々が日常言語において、確定記述を用いるのは、まさに単一の対象を指示しようとするために他ならない。記述も固有名と共に、「言及(識別)の仕事 the referring (or identifying) task」⁽¹¹⁾を果そうとすると解されるのであり、indicating と denoting との果そうと意図している言及、という意味論的機能は同一のようにみえる。記述理論は『諸原理』の意味論の諸困難回避に有効であったが、逆

に固有名と記述との相違を強調したことにより、どちらも言及・識別がその主たる機能であるという周知の事実とずれを生じている。しかしこの論争的問題の⁽¹²⁾立ち入った検討は、小論の範囲を越える故、課題として残される他はない。

(四) ところでラッセルは更に、記述理論に認識論的解釈を与えて、「吾々が感知する apprehend あらゆる命題」その真偽を判断できる命題のみならず、吾々がそれについて考えうるすべての命題⁽¹³⁾において、すべての構成要素は吾吾がその直接の見知り immediate acquaintance をもつ實在的存在者 real entity⁽¹³⁾であるべしという、命題分析上の認識論的原則を提示した。この一部経験論に傾斜した原則を、意味論的原則⁽¹⁴⁾とする。見知りの対象は、感覚与件^{センス・デーア}、意識主体 subject-term of awareness である私、及び概念である⁽¹⁴⁾。

例えばしかし固有名の「指すもの」^{インデクセーション}、記述の「指示体」^{インデクセーション}、また論理的構文論上の個体定項や個体変項の値である個体 individuals が、必然的に感覚与件（たといそれが一般的に複合体 complex⁽¹⁵⁾であるとしても）であるとは断定できない。ラッセルも後に認めるように、個体は、「問題になっている脈絡中では分析されず、また主語として以外に登場しないような項」である「相対的個体 relative individuals⁽¹⁶⁾」でよいのであって、厳密に現象論的に解釈される必要はない。

従ってこの認識論的な意味論的原則⁽¹¹⁾は、記述理論の、見知りという特定の認識論的規準からみた可能的解釈の一つにすぎないのであって、記述理論の必然的帰結ではないと考えられる。

かくて、記述理論の意味論への直接的貢献は、意味論的原則⁽¹¹⁾であって、意味論的原則⁽¹²⁾は、経験論的認識論の見地からの、記述理論の可能的解釈の一つではあっても、記述理論からの直接的必然的帰結ではないと私は考える。

(1) Russell, [OD], p. 51.

(2) ラッセルは「真又は偽の命題 proposition をその言語的表現である文 sentence から区別して、一種の存在者とみなして」
※ ([POM], § 38, p. 35)。文と命題との意味論的關係は相当錯綜しており詳しくは別の機会に譲らねばならぬが、若干の

点だけ指摘しておく。文は命題を表現する *express* と言われ ([*POM*], § 46, p. 42) 命題には、実際断定された命題 actually asserted proposition と、単に複合的概念である非断定命題 unasserted p. とが区別されている。([*POM*], § 38, p. 34) 後者は命題概念 propositional concept の (*ibid.*) フレーゲの *Gedanke* と同義的と解される。([*POM*], Appendix A, § 477, p. 503) また、[Meinong], p. 350. では、命題 (断定命題である) とライプニッツの事態 *Objektiv* が同一視され、かつ文が事態を指す *indicate* と言われている。他方ライプニッツは、文の *Bedeutung* が真理値だとするフレーゲに反対し、断定命題はその意味が真である命題である ([*POM*], Appendix A, § 479, pp. 504-5) 真なる命題のみが断定命題である (*ibid.*, § 38, p. 35; Appendix A, § 478, pp. 503-4) である。また知覚判断 *judgment of perception* の場合、知覚の客体である単一の複合的対象 a single complex object の存在がその判断の真理性の必要十分条件であり、知覚判断に知覚のかかる単一の複合的対象が対応する *correspond* するものが真であるといわれる ([NTF], pp. 155 f.) と主張されている。かくて、命題の意味とは、非断定命題、命題概念、フレーゲの *Gedanke* と解される。だが、この意味がフレーゲと同様、文によって表現されていると言いつつどうか判断しよう。他方、文の指す事態とは、断定命題、知覚の単一の複合的対象、actual state of affairs であり、これは言わば、文の「意味」である。

- (3) Russell, [OD], p. 51.
- (4) Vide. Russell, [*POM*], Intro. to 2 nd ed., X.
- (5) Russell, [OD], p. 51; [*PM*] Vol. I, Pt. I, Sect. B, * 14, 204, p. 181.
- (6) [OD], p. 46, footnote †.
- (7) 不確定記述 indefinite description も命題関数とその変項の一般化に分析され ([OD], pp. 42f.) 消去されるから、「意味」はもたないが、その「指示体」は一般に多義的とされ (*ibid.*, p. 41) 『諸原理』の説との本質的相違は明言されていない。
- (8) Russell, [*PM*], Vol. I, Pt. I, Sect. B, 14, pp. 174-5; [*IMP*], p. 176.
- (9) [*PM*], Vol. I, Intro. Ch. III, p. 67; [*IMP*], pp. 174-5.
- (10) Strawson, [19], p. 164.
- (11) *ibid.*, pp. 163-4.

- (12) ストローンを中心とする論争のみならず、論理的構文論上での記述理論を、日常的用法からみてより自然な形に構成しようとする試みがなされている。Hintikka, [9]; Scott, [16], 竹尾 [22].
- (13) Russell, [OD], p. 56; Russell, [KAKD], p. 157.
- (14) [KAKD], pp. 153-4.
- (15) *ibid.*, pp. 153 f.
- (16) Russell, [MFP], pp. 173-4.

V. 記述理論と存在論

(一) 『諸原理』の存在論には、少くとも次の如き難点があった。

(i) 通常考えられている如く「キマエラ」とか「ハムレット」とかが、固有名だとすると、それらは必ず何かを指す^{インディケイト}はずである。しかしそれらの「指すもの indication」とはどのような存在者か。

(ii) 「現在のフランス王」「まるい四角」といった類の指示句は、「指示概念」を指すはずであるが、この奇妙な複合的抽象存在にはどのような存在論的地位が与えられるのか。

(iii) 「指示概念」は指示する^{デイクスト}のだが、フランス王とか円い四角とかの「指示体」とは一体どんな存在者か。

記述理論によるこれらの難点の回避は以下の如くである。

(i) ラッセルは、後に「自己中心語 egocentric words」以外の名前は実は記述であるとみなしているから、⁽¹⁾「キマエラ」も「ハムレット」も実は固有名ではなくて、指示句・記述であり、従って何も指さない。

(ii) 記述理論の示したことは、指示句・記述の完全消去であった。記述は真の単独語・固有名ではないから何もものも指しはしない。従ってオッカムの剃刀により「意味(S)」である「指示概念」という抽象的存在者は存在論から追放さ

れてよい。

(iii) 他方、単一の対象を指示し、記述するのは、「指示概念」ではなくて、指示句・記述である。しかしラッセルの記述理論は、本来的記述のみならず、非本来的記述も消去しうる手続きとなっているから、記述に必ず「指示体」が対応せねばならぬ必然性はない。非本来的記述には、端的に、いかなる「指示体」もない。従って、「キマエラ」「ハムレット」「現在のフランス王」「円い四角」などの「指示体」の、存在論的地位に頭を悩ます必要はない。

かくて、存在論を言語の論理的構造との相関において構想するという方針を堅持すれば、記述理論により到達された存在論上許容される存在者は以下の如くである。

(a) 「固有名(S)」の指す「もの thing」。(本来的記述の「指示体」も「もの」である。非本来的記述にはいかなる「指示体」もない。)

(b) その他の単独語の指す「述語」ないし「関係」、つまり「概念 concept」。(但し、「指示概念」は「概念」の世界から放逐される。)

(c) ところでラッセルは、論理的見地から構想され、意味論的原則(I*)とみあうところの、「もの」と「概念」から成る存在論に、意味論的原則(II)にみあう「存在者は見知りの対象であるべし」という認識論的見地も併せて導入し、「もの」を「個別者 particulars」、「概念」を「普遍者 universals」と呼ぶ⁽²⁾。

「個別者」と「普遍者」との存在論的区別根拠は、命題という複合体中で論理的主語であるか、述語ないし関係であるか、といった論理的区別根拠に基づくというより、むしろ「ある空間関係は、その諸項の異他性 diversity を含意する⁽³⁾」という認識論的根拠に求められる。即ち「個別者」は、時間のうちに存し、それらの属する空間において同時に二つ以上の場所を占めない存在者であり、⁽⁴⁾「存在 existence」をもつ⁽⁵⁾のに対し、「普遍者」は、時間のうちには存在せず、一つの場所に、ある関係をもてば、同時に必ず他の場所にもその関係をもつことになるような存在者⁽⁶⁾であっ

て、「普遍者」は存在 exist せずして、単に存立する subsist ないし有をもつ have being のみであり、「普遍者」の世界は有の世界 the world of being であると考えられる。⁽⁷⁾

ところで、記述理論の意味論への直接の帰結とみなされた意味論の原則(I^{*})^(II^{*})と、現象論的な認識論的解釈に基づく意味論の原則(III)との間に間隙が認められたように、記述理論によって整理された存在論上の「もの」と「概念」とが、認識論上の見知りの対象に限定されるべきかどうか疑わしい。「もの」には、物理的対象 physical objects も含まれていると考えられる。存在論への記述理論の直接的貢献については、私は、(i) 非本来的記述には、いかなる「指示体」も対応せず、(ii) 「意味(S)」即ち「指示概念」は、「概念」という抽象的存在者から消去されてよい、の二点であると考ええる。論理的見地から構想された存在論上の「もの」と「概念」との区別は、認識論的な考慮に主に依拠する「個別者」と「普遍者」との区別とは一応独立と考えられる。「もの」と「概念」が、見知りの対象であるべしという存在論上の要請は、記述理論に特定の認識論的解釈を重ねあわせてはじめて可能であるとみなされる。

ところで、存在論が、言語の論理的構造分析以外に、認識論的分析との連関を必然的に組み込むべきか否か、更に一般的に言えば、存在論は、吾々の言語の論理的枠組や認識構造と、真に必然的な相関関係にあって、それらとは独立に構想しえぬものなのかどうか、といった問題は、もはや小論の範囲を超えた新たな探究を要求するであろう。

(7)

- (1) Russell, [MP], p. 178.
- (2) Russell, [RUP].
- (3) *ibid.*, p. 124.
- (4) *ibid.*
- (5) Russell, [PP], p. 100.

- (ω) Russell, [RUP], p. 124.
 (ν) [PPh], p. 100.

——參考文獻——

Russell, Bertrand :

- [POM] : *The Principles of Mathematics*, Cambridge, 1903.
 [Meinong] : Meinong's Theory of Complexes and Assumptions, *Mind*, n. s. xiii, 1904. (II. pp. 336-354).
 [OD] : On Denoting, 1905 (repr. in [LK], pp. 41-56).
 [NTE] : On the Nature of Truth and Falschhood, 1906 (repr. in [PPhE], Ch. vii, pp. 147-159).
 [Review] : Review of A. Meinong's *Ueber die Stellung der Gegenstandstheorie im System der Wissenschaften*, *Mind*, n. s. xvi, 1907 (pp. 436-439).
 [ML] : Mathematical Logic as Based on the Theory of Type, 1908, (repr. in [LK], pp. 59-102).
 [PM] : *Principia Mathematica*, Vol. I, with A. N. Whitehead, Cambridge, 1910.
 [PPhE] : *Philosophical Essays*, London, 1910 (Rev. ed., 1966).
 [KAKD] : Knowledge by Acquaintance and Knowledge by Description (repr. in [MLE], Ch. X, pp. 152-167).
 [PPh] : *The Problems of Philosophy*, Oxford, 1912.
 [MLE] : *Mysticism and Logic and other Essays*, London, 1918.
 [IMP] : *Introduction to Mathematical Philosophy*, London, 1919.
 [LK] : *Logic and Knowledge*, ed. by R. C. Marsh, London, 1956.
 [RUP] : On the Relations of Universals and Particulari, 1911 (repr. in [LK], pp. 105-124).
 その他著者の論文・著書及び略歴 :
 [Ph. B. R.] : *The Philosophy of Bertrand Russell*, ed. by P. A. Schilpp, Evanston, 1944. (Harper Torchbook edition, New York,

1963).

[B. R.] : *Bertrand Russell : Philosopher of Century*, ed. by R. Schoenman, London, 1967.

[Frege] : *Essays on Frege*, ed. dy E. D. Klenke, Urbana, 1963.

[*Essays*] : *Essays on Bertrand Russell*, ed. by E. D. Klenke, Urbana, 1970.

[1] Black, M., Russell's philosophy of Language, 1944 (in [*Phil. B. R.*] Vol. I, pp. 227-256).

[2] Butler, R. J., The Scaffolding of Russell's Theory of Descriptions, *Philos. Rev.*, Lxiv, 1954, pp. 350-364.

[3] Cassin, C. E., Russell's Discussion of Meaning and Denotation, 1970 (in [*Essays*] : 16, pp. 256-272).

[4] Caton, C. E., Strawson on Referring, *Mind*, Lix, 1950 (repr. in [*Essays*] : 13, pp. 213-219).

[5] Church, A., Carnap's *Introduction to Semantics*, *Philos. Rev.*, Lii, 1943, pp. 298-304.

[6] Findley, J. N., *Meinong's Theory of Objects and Values*, London, 1933.

[7] Geach, P. T., Russell on Meaning and Denoting, *Analysis*, xix, 1959 (repr. in [*Essays*] : 12, pp. 209-212).

[8] Gram, M. S., Ontology and the Theory of Descriptions, 1970 (in [*Essays*] : 7, pp. 118-146).

[9] Hintikka, K. J., Towards a Theory of Definite Descriptions, *Analysis*, xix, 1959, pp. 79-85.

[10] Hochberg, H., Strawson, Russell, and the King of France, 1970 (in [*Essays*] : 19, p. 309-340).

[11] Jäger, R., Russell's Denoting Complex, *Analysis*, xix, 1960, pp. 53-62.

[12] Klenke, E. D., Logic and Ontology in Russell's Philosophy, 1970 (in [*Essays*] : 26, pp. 416-444).

[13] Linsky, L., Reference and Referents, in Caton, C. E. ed., *Philosophy and Ordinary Language*, 1962 (repr. in [*Essays*] : 14, pp. 220-235).

[14] Meinong, A., *Ueber die Stellung der Wissenschaftstheorie im System der Wissenschaften*, Leipzig, 1903.

[15] Moore, G. E., Imaginary Objects, *Pr. Ari. Soc. Suppl.*, xii, 1933.

[16] Scott, D., Existence and Description in Formal Logic, 1967 (in [*B. R.*] Ch. 16, pp. 181-200).

[17] Searle, J. R., Russell's Objections to Frege's Theory of Sense and Reference, *Analysis*, xviii, 1958 (repr. in [*Frege*] : 19,

pp. 337-345).

- [18] Sellars, W., Presupposing, *Philos. Rev.*, Lxiii, 1954 (repr. in [*Essays*] : 9, pp. 173-189).
 - [19] Strawson, P. F., On Referring, *Mind*, n. s. Lix, 1950 (repr. in [*Essays*] : 8, pp. 147-172).
 - [20] Strawson, P. F., A Reply to Mr. Sellars, *Philos. Rev.*, Lxiii, 1954 (repr. in [*Essays*] : 10, pp. 190-204).
 - [21] Strawson, P. F., Identifying Reference and Truth-values, *Theoria*, xxx, 1964 (repr. in [*Essays*] : 15, pp. 236-255).
 - [22] 竹尾治一郎「対応するものがない名辞について」大阪教育大学紀要、第十八巻一、一九六九、十九—二八頁。
 - [23] 野本和幸「B. Russell の存在論(その1)」茨城大学教養部紀要、第三巻、一九七一、一一—二七頁。
- 附記 小論の要旨は、一九七一年度日本科学哲学学会大会に於て口頭発表された。

(筆者 茨城大学教養部助教授)

THE OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

*Significance of Russell's Theory of Description viewed from his
own Development in Semantics and Ontology.*

by Nomoto Kazuyuki

1. There are two semantical principles in *The Principles of Mathematics* (1903):
 - (1) Every word occurring in a sentence *indicates* a certain entity, and must have a psychological meaning (indication).
 - (2) A denoting concept *denotes* a thing or a combination of things and thus has a logical meaning (denotation).
2. But Russell discovered a difficulty in the above-mentioned semantical principles. He argued in "On Denoting" (1905) that we could not succeed in both preserving the connection of meaning (denoting concept) with denotation and in preventing them from being one and the same. This argument shows Russell's turning point in semantics.
3. 1905's Theory of Description shows that a denoting phrase is essentially part of a sentence, and does not, like most single words, indicate anything.

Thus the two semantical principles are modified as follows:

- (1) Every single word in a sentence has a meaning as indication, but a denoting phrase or description has no such meaning (denoting

concept) on its own account.

- (2) It is merely in the case of its *proper* use that a definite description denotes a unique object which is the denotation of the description. These two principles are, I think, all that directly follows in semantics from the Theory of Description.
- (3) Further, Russell proposes an epistemological principle in the analysis of propositions, namely, that every proposition that we can understand is composed wholly of real entities with which we have immediate acquaintance.

I think, however, this principle of reducibility to acquaintance is logically independent from the Theory of Description, although it may be taken as one of its possible interpretations.

4. Russell rejected his own populous ontology in *The Principles of Mathematics*, because in such an ontology, there is a failure of a robust sense for reality. This change in his ontology began with his criticism of Meinong's theory.

5. The Theory of Description made necessary the following changes in his ontology :

- (1) By Occam's razor, an abstract entity such as meaning (denoting concept) is deleted from his ontology of 1903.
- (2) An improper description has no denotation.

Further, Russell introduced a distinction between particulars and universals based mainly on an epistemological ground other than that of the distinction between *things* and *concepts*.

But whether things should be restricted to the objects of acquaintance is questionable.